



フィールドで考える

「水上人」の幻影

長沼 さやか (ながぬま さやか)

本館外来研究員

イメージと違う現実の生活

「言霊」とは、発したことを現実にする
ことばの力であるという。その文字や響
きは、どこか神秘的で超自然的なイメ
ージをたたえている。しかし、実際のあや
ふやなものが名前をつけられ、まことし
やかに語られることならば、わたしはち
の身近でも頻繁に起こりうる。わたしが
フィールドワークをしていた中国広東省
珠江デルタでも、研究対象である「水上人」
とよばれる人びとをめぐり、しばしばそ
のような状況を目にした。

中国には多くの民族が暮らしているが、
その全人口の約九五パーセントは多数派

意志を生みだすか

しかし、ブームに沸き立つ政府に対し
て、沙田の人たちの反応は薄い。そもそも
咸水歌は沙田の人びとの民謡なのかとい
えば、じつはそうでもないのである。咸
水歌など歌ったこともない、咸水歌がど
んなものか知らないという人もいる。自
分たちはそう思っていないのに、他から
水上人と言われるのと同様で、咸水歌と
いう「伝統」もよそからもち寄せられたも
のらしい。とすれば、いったい何が水上
人という存在や、咸水歌という「伝統」を
今日まで保持してきたのだろう。それは、
「水上人」や「咸水歌」といった「名」であ
るように思える。それらはまるで言霊の
ように、書物や人びとの口に上るたび、
水上人の幻影をまことしやかに描き出し
てきたのだろう。

そうしてみると、異なる方言や風俗習
慣をもつ人びとを、一口に「漢族」とよび
合わせることも、ある意味でことばの力
と言えないのではないだろうか。ただ、水
上人をめぐる状況と異なるのは、その幻
影を受け入れようとする意志が、人びと
に共有されているという点である。こと
ばに宿る力は、いつかその意志までも生
みだすことができるだろうか。そんなこ
とを考えながら、フィールドと日常のは
ざまを行き来している。

である漢族で占められている。しかし、
一口に漢族といつても方言、風俗習慣な
どはさまざまである。たとえば、首都北
京から南へ二〇〇〇キロメートル以上離
れた広東省では、標準中国語とは発音・
語法ともに異なる広東語が話されている。
しかし、彼らもまた漢族だ。さらに、広東
の中心部である珠江デルタでは、同じ広
東語の話者でも、住む場所によって風俗
習慣が異なっている。やや海拔の高い地
域に住む人たちは「陸上人」、海拔の低い
「沙田」とよばれる地域に住む人たちは「水
上人」とよばれ、ときに隔たりをもちな
がら生活してきた。

水上人はかつて「蛋家」ともよばれ、そ

の多くは船を家にしたたり、川の中州など
に簡素な小屋をつくったりして、流動的
な生活を送っていた。レンガで建てた立
派な家に住む陸上人からすれば、こうし
た人びとは住所不定の不審者であった。
そのため、水上人はしばしば陸上人から
差別されたり、非漢族とみなされたりし
た。やがて中華人民共和国成立後、こう
した人びとも政策の影響を受け定住した。
文献などには、水上人は「先祖代々船
に住み漁業をしてきた人びと」であり、「古
代越族が漢族化したもの」と書かれてい
る。船上生活は、広東の先住民民族・越族の
特徴だからという論拠らしい。しかし、
父の世代まで船に住み漁業をしていたと
いうわたしの知人は、決してそんなふう
に思っていない。自分たちを水上人と思
っている。漢族であると考えている。それ
に、水上人はかならずしも先祖代々船で暮らして
いたわけではない。ある老人は言う。「わ
たしの家は、もとは陸で米屋をしていた
が、祖父の代に破産し、家を売り払い、船
で暮らすようになったんだ」。また、船上
生活をしたことのない人もいる。生業も、
漁業や水運業のような船を必要とするも
のに限らない。むしろ、陸上で賃金労働
をしていた人のほうが多かった。つまり、
文献を記した学者たちの決めつけをよそ
に、水上人は陸上に近い生活を送ってい
たのだ。

無形文化遺産の咸水歌

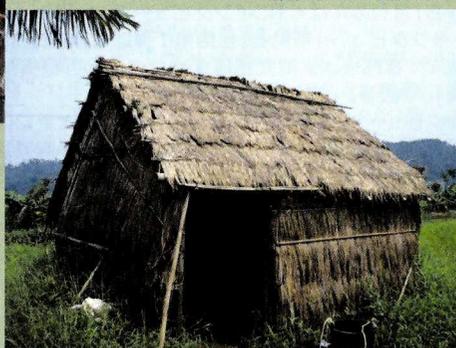
そんな水上人が、わたしが訪れている
珠江デルタ南部の広東省中山市で、近こ
ろちよつとしたブームとなっている。水
上人の民謡と言われる「咸水歌」が、民間
芸術として脚光を浴び始めたのである。
近年、中国では近代化とともに失われつ
つある「伝統文化」を保護し、観光資源と
して利用する動きが高まっている。そん
な折りに、注目されたのが水上人の咸水
歌だった。感情を即興で表現する咸水歌
は、「テレビもインターネットもなかつ
た時代の素朴な娯楽」とされた。こうし
た口上は、都市に生きる現代人のノスタ
ルジーを巧みにくすぐった。

以後、中山市では、水上人の暮らして
きた沙田を「水郷」とよび、そこに住む人
びとの風俗習慣を「水郷文化」と名づけ、
観光資源として活用し始めた。二〇〇〇
年には市内に、水郷文化の参観・体験を
趣旨としたテーマパークが建設された。
また、咸水歌の名手が、アマチュア歌手
として政府に起用され、市内のみならず
広東省内外に公演に出かけるようにな
った。著名な歌手を多く輩出した鎮（市
に属する行政区）では、咸水歌の資料館
がつくられた。さらに二〇〇六年には、
その鎮の咸水歌が国の無形文化遺産に
選ばれた。これらを経て、水郷文化をめ
ぐる観光開発はさらに加速している。

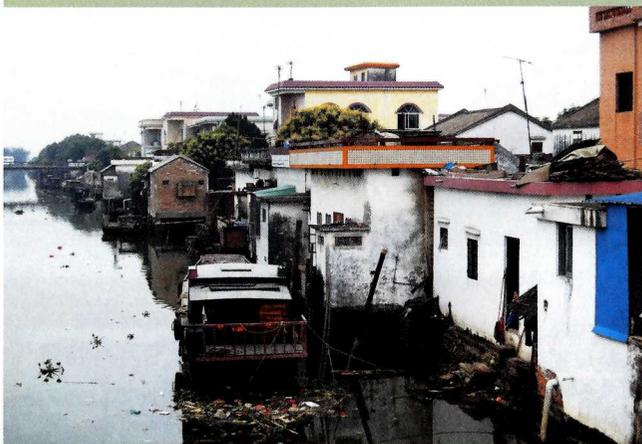
沖積地を開墾した沙田は、
海拔が低く水害が多い



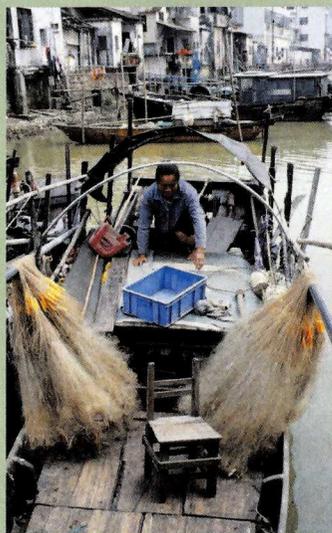
かつて沙田の人びとが住んでいた
解体・移動が可能な小屋



テーマパークの催し物で咸水歌を歌う女性



現在の沙田の家並み。船をもつ世帯は減っている



漁業をする人は移動に
便利な船に住んでいた